

2024年度

学生による授業評価
よりよい授業を目指して

報 告 書

2025年9月

和洋女子大学

目次

1. はじめに	3
2. 授業評価実施概要	4
3. 評価	5
4. 総括	5
(1) 全学授業評価結果の概要	5
1) 教員の授業設計と運営について	10
2) 出席率の高低群と授業評価について	11
3) 授業形態別による評価	12
(2) 授業の総合満足度からみた今後の課題	15
1) 共通総合科目(全学教育センター)の課題 (全学教育センター長 鬘谷要)	17
2) 日本文学文化学科の専門科目の課題 (学科長 佐藤勝明)	18
3) 心理学科の専門科目の課題 (学科長 小沢哲史)	19
4) こども発達学科の専門科目の課題 (学科長 大神優子)	19
5) 英語コミュニケーション学科の専門科目の課題 (学科長 星野文子)	20
6) 国際学科の専門科目の課題 (学科長 金丸裕志)	21
7) 服飾造形学科の専門科目の課題 (学科長 森本美紀)	22
8) 健康栄養学科の専門科目の課題 (学科長 杉浦令子)	23
9) 家政福祉学科の専門科目の課題 (学科長 丸谷充子)	23
10) 看護学科の専門科目の課題 (学科長 大堀昇)	24
5. 資料	27

1. はじめに

和洋女子大学では内部質保証の主たる対象を教育活動と考え、教育の充実と学習成果の向上を図るために入学者受入方針（以下「アドミッション・ポリシー」）、教育課程・編成実施方針（以下「カリキュラム・ポリシー」）、学位授与方針（以下「ディプロマ・ポリシー」）の3つのポリシーに基づいて具体的な目標を策定し自己点検・評価、改善を進めることを重要視している。また、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーの3つのポリシーを評価するために、「入学前・入学直後」、「在学中（単位認定・進級判定）」、「卒業時（卒業後）」の各時期に、「大学（機関）レベル」、「学部・学科（教育課程）レベル」、「授業科目レベル」の3つのレベル（水準）を設定している。この基準を和洋女子大学の教育課程の質を保証するための「アセスメント・ポリシー」として活用している。さらに、授業評価アンケートには、授業内容の理解度の確認、教員の指導力の評価、授業の構成・適切な進捗の評価、学生に対する学びの動機付けやモチベーション向上の取組、学習環境の整備、フィードバックの構築など、多くの評価ポイントが存在するが、いずれも、教員が自らの講義の質を客観的に点検し、改善を目指すためにその役割は大きい。

昨今、社会におけるAIの急速な普及は、教育の在り方そのものに大きな変革をもたらしつつある。知識をただ伝達するだけの教育から、AIを活用しつつも、人間にしかできない創造力や批判的思考、協働する力を育む教育へと、その役割が変遷しつつある。同時に、AIを使う際の倫理的規範の確立が求められている。こうした時代においてこそ、学生の主体的な学びを尊重し、学修の質を高めることが肝要と考える。

本報告書が、授業改善に向けた教員の努力と学生の積極的な学びの姿勢を結び付け、より実りある教育環境を築く一助となることを心から願うものである。末筆ながら、調査にご協力をいただいた学生諸氏と、結果の分析と評価に多大なご尽力をいただいた教職員の皆様に心から感謝の意を申し上げたい。

和洋女子大学 学長
金子健彦

2. 授業評価実施概要

授業評価は、前期開設科目については2024年7月2日(火)～7月29日(月)、後期開設科目及び通年開設科目については2024年12月21日(土)～2025年1月27日(月)の期間中に実施した。なお、各期の前半科目は5～6月と11月に実施した。

2024年度の開設科目は、前期700科目、後期705科目、通年72科目、前期集中24科目、後期集中21科目、通年集中134科目で、合計1,656科目である。このうち授業評価対象科目は、佐倉セミナー科目、学外実習科目、集中科目、大学院科目、同時開講科目、読替科目、受講者数10人以下の科目を除いた合計1,059科目で、全開講科目の63.9%に相当する。

評価は、manaba courseの自動アンケート機能を利用したWEB回答方式のアンケートで実施し、各授業科目について評価と自由記述を学生に入力させた。アンケートの設問は巻末「2024年度授業評価アンケート設問」とおりである。主に教授方法・スキルに関する評価、授業準則・秩序に関する評価、知的刺激や理解度関連達成度に関する評価、主体的学修に関する評価、教員の熱意に関する評価、総合的満足度、学生自身の授業への参加度に関する自己評価、学びの目標(ディプロマ・ポリシー)においての自己評価などの項目から構成されている。なお、アンケートは5段階評価として設計されている。5は「強くそう思う」(Q24は「とても満足」)、4は「そう思う」(Q24は「満足」)、3は「どちらでもない」、2は「そう思わない」(Q24は「やや不満足」)、1は「全くそう思わない」(Q24は「不満」)、0は「該当しない・答えたくない※集計の平均値には含めない」を意味している。

調査は、実施期間中の各授業の終了時の15分程度を利用し、原則として科目担当教員がアンケートの指示を出し、教員が教室を退室した後、スマートフォン等で回答入力を学生自身が行なった。メディア授業(遠隔オンデマンド)で開講された科目については、最終授業時または最終課題を提示した時にmanaba courseの各科目コース内で科目担当教員が指示を掲載し、指示から回答までに1週間程度の猶予を設け実施した。科目担当教員は授業科目毎のアンケートデータをmanaba courseでいつでも確認ができ、教員毎の結果は業者に委託して集計され別途通知される。各教員は、授業評価の結果を各自で検討し、その感想・教育活動の振り返りなどについて、全担当科目を総括してティーチング・ポートフォリオを作成した。この文書はmanaba courseにて教員が閲覧することができ、学内において相互の授業改善の工夫等を共有している。

3. 評価

年間の教員別総合満足度の順位を公表する。高評価であった以下 10 名は 2025 年 4 月 8 日付全学部教授会において表彰された。

順位	総合満足度 pt.	所属	教員名 (敬称略)
1	4.88	英語コミュニケーション学科	内田 翔大
2	4.84	こども発達学科	甲斐 万里子
3	4.823	心理学科	佐瀬 竜一
4	4.818	看護学科	河村 秋
4	4.818	看護学科	宮本 大樹
6	4.815	服飾造形学科	伊藤 瑞香
7	4.768	服飾造形学科	水野 一枝
8	4.765	看護学科	中澤 明美
9	4.76	日本文学文化学科	佐藤 勝明
10	4.75	看護学科	久保 幸代

*総合満足度 pt. は 5 点満点 *オムニバス科目は反映しない *非常勤講師は除く

4. 総括

2024 年度は、COVID-19 後の授業体制が定着し、多くの科目が対面授業を主体とする一方で、メディア授業(遠隔オンデマンド)も一定数実施された。授業評価アンケートは、2021 年度からの設問構成を踏襲しつつ、今年度も大学教育の質保証を可視化する目的で実施された。学生自身が 4 年間の学びの目標となる大学のディプロマ・ポリシーを意識するよう評価項目に示し教育の中でも中心を占める授業がそれに答えられているのかを質問した。質問項目は、「Q18 学びの目標達成に近づいた」、「Q19 自分を誇りを持つ力が向上した」、「Q20 基礎学力と文章力が向上した」、「Q21 人を理解し自分を表現する力が向上した」、「Q22 課題を解決する力が向上した」、「Q23 社会に役立つ専門力が向上した」の設問を通じて、授業がその達成にどの程度寄与しているかを評価した。

(1) 全学授業評価結果の概要

以下に評価結果の全体概要を示す。個々の授業についての評価結果を全体としてまとめたものが図 1 である。また、授業形態別の評価結果を図 1①②に示した。

授業アンケート結果集計表

【授業】全体				履修者数	46266名
				回収数	24153名
				回収率	52.2%

	対面のみ	対面と 遠隔	対面の授業 (遠隔利用) のみ	対面の授業 (遠隔利用) と両方 がある	その他
Q1.授業開講方法	21606	0	0	2547	0

項目別回答分布(人数と平均値)	5	4	3	2	1	無回答	全体平均
Q2.シラバスに沿っていた	12705	10174	998	157	53	66	4.47
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	12428	10037	1279	257	97	55	4.43
Q4.新しい知識・技術を学べた	13479	9400	964	175	77	58	4.50
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	11029	9772	2308	651	219	174	4.28
Q6.教材が理解に役立った	11926	10076	1573	330	115	133	4.39
Q7.説明がわかりやすかった	11150	10017	2112	580	226	68	4.30
Q8.質問できる時間や環境があった	10581	10169	2558	477	158	210	4.28
Q9.質問への対応が適切だった	10372	9872	2834	318	131	632	4.28
Q10.出席確認の方法が適切だった	13713	8855	1148	278	90	69	4.49
Q11.運営時間、学習量が適切だった	10849	10755	1817	518	155	59	4.31
Q12.教員の熱意を感じた	12441	9614	1684	236	100	78	4.41
Q13.積極的に意見や質問をした	7059	7765	5553	2281	736	759	3.77
Q14.よく出席 参加した	14756	7600	1399	279	73	46	4.52
Q15.自己学習の時間を確保した	8674	10494	3456	1032	252	245	4.10
Q16.試験や課題に積極的に取り組んだ	11807	10049	1753	263	69	212	4.39
Q17.さらに勉強しなくなった	9758	10838	2666	565	215	111	4.22
Q18.学びの目標達成に近づいた	10071	10847	2479	425	169	162	4.26
Q19.自分を知り勝る力が向上した	8126	9666	4689	922	247	503	4.04
Q20.基礎学力と文筆力が向上した	8643	10623	3630	645	179	433	4.13
Q21.人を理解し自分を表現する力が向上した	8564	10093	4109	696	208	483	4.10
Q22.課題を解決する力が向上した	9000	10869	3278	516	154	336	4.18
Q23.社会に役立つ専門力が向上した	10116	10562	2649	417	170	239	4.26
Q24.授業の総合満足度	13304	8658	1583	348	181	79	4.44

【Q14】で授業への出席率の高い群(5.4)の回答分布

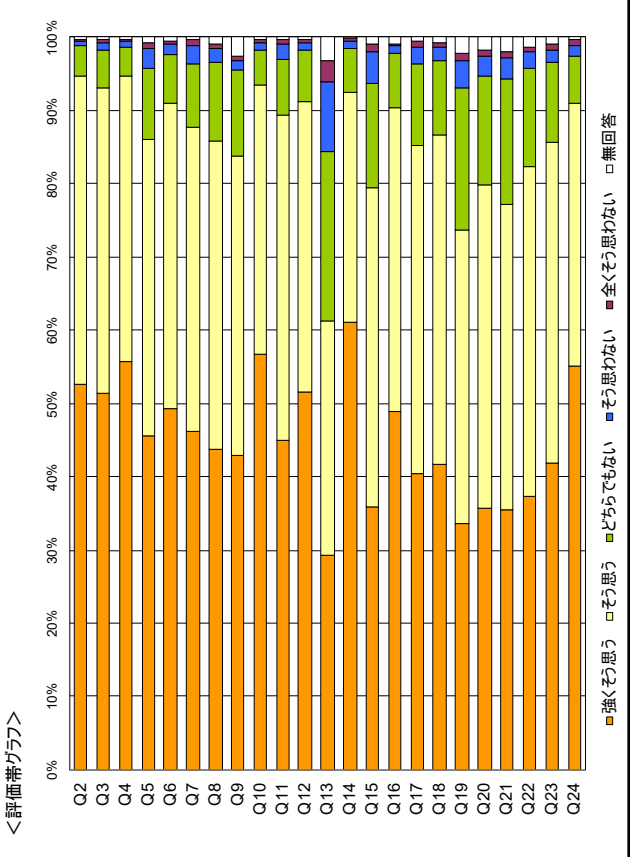
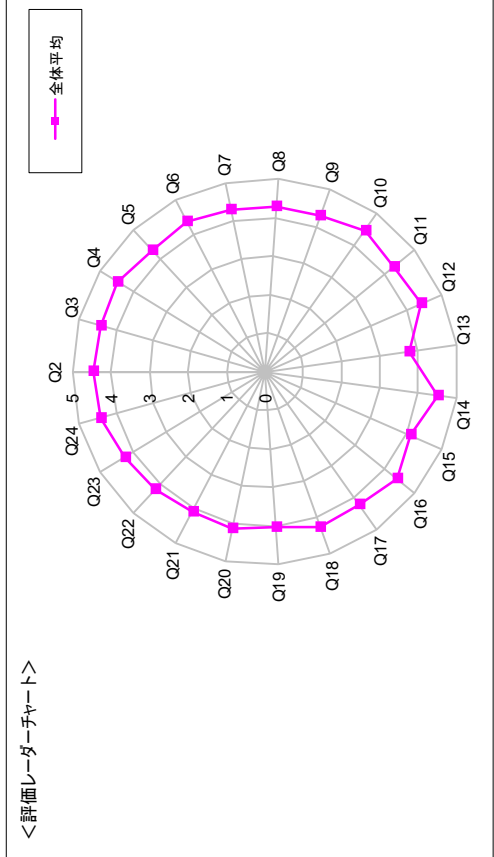
	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	12197	9101	589	61	8	6	4.52
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	10876	9139	1547	267	32	101	4.40
Q6.教材が理解に役立った	11713	9157	894	104	17	77	4.48
Q7.説明がわかりやすかった	11035	9431	1257	201	19	19	4.42

【Q14】で授業への出席率の低い群(3.2.1)の回答分布

	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	224	915	681	194	85	13	3.48
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	147	619	751	380	181	34	3.08
Q6.教材が理解に役立った	205	903	669	223	95	17	3.43
Q7.説明がわかりやすかった	108	573	843	375	201	12	3.01

図 1 全体

2024年度通期 和洋女子大学



＜計値＞データ＜

＜評価帯グラフ＞

Item	Orange (%)	Green (%)	Blue (%)	Yellow (%)
Q2	53	12	2	33
Q3	52	12	2	34
Q4	55	12	2	31
Q5	48	12	2	38
Q6	50	12	2	36
Q7	47	12	2	39
Q8	45	12	2	41
Q9	44	12	2	42
Q10	58	12	2	28
Q11	46	12	2	40

Quarter	A lot	A little	Not at all	Don't know
Q13	10	40	40	10
Q14	15	35	40	10
Q15	20	30	40	10
Q16	25	25	40	10
Q17	30	20	40	10
Q18	35	15	40	10

■ 強く思う ■ そう思う ■ どちらでもない ■ そう思わない ■ 全く思わない □ 無回答



授業アンケート結果集計表

キャンパス		曜日	履修者数	
学部	学部	期限	回収数	回収率
科目	メディア授業(遠隔オンデマンド)のみ			
教員				

Q1.授業開講方法	対面のみのみ	メディア授業(遠隔オンデマンド)のみ		メディア授業(遠隔オンデマンド)のみ	その他
		対面と遠隔	対面のみ	対面と遠隔	対面のみ
	0	0	0	0	2547
	0	0	0	0	0

項目別回答分布(人数と平均値)									
	5	4	3	2	1	無回答	平均	全体平均	
Q2.シラバスに沿っていた	1256	1134	119	14	6	18	4.43	4.46	
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	1197	1154	147	29	11	9	4.38	4.44	
Q4.新しい知識・技術を学べた	1326	1062	118	23	7	11	4.45	4.51	
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	837	1048	464	81	11	106	4.07	4.28	
Q6.教材が理解に役立った	1221	1123	151	33	10	9	4.38	4.39	
Q7.説明がわかりやすかった	1048	1168	246	55	18	12	4.25	4.29	
Q8.質問できる時間や環境があった	803	1128	437	82	11	86	4.07	4.28	
Q9.質問への対応が適切だった	800	1007	529	34	10	167	4.07	4.26	
Q10.出席確認の方法が適切だった	1187	1107	172	47	14	20	4.35	4.49	
Q11.運営時間、学習量が適切だった	1002	1225	237	60	13	10	4.24	4.29	
Q12.教員の熱意を感じた	1101	1134	257	32	8	15	4.30	4.39	
Q13.積極的に意見や質問をした	579	697	720	289	113	149	3.56	3.86	
Q14.よく出席・参加した	1465	847	179	34	10	12	4.47	4.55	
Q15.自己学習の時間を確保した	774	1103	473	136	31	30	3.97	4.17	
Q16.試験や課題に積極的に取り組んだ	1192	1102	197	28	6	22	4.36	4.41	
Q17.さらに勉強したくなった	935	1165	342	66	19	20	4.16	4.28	
Q18.学びの目標達成に近づいた	839	1148	418	88	17	37	4.08	4.33	
Q19.自分を知識・理解力向上に近づけた	763	1050	540	116	23	55	3.97	4.12	
Q20.基礎学力と文章力が向上した	796	1174	451	68	14	44	4.07	4.16	
Q21.人を理解し自分を表現する力が向上した	836	1099	468	75	23	46	4.06	4.18	
Q22.課題を解決する力が向上した	858	1150	420	66	15	38	4.10	4.25	
Q23.社会に役立つ専門力が向上した	918	1154	373	51	20	31	4.15	4.34	
Q24.授業の総合満足度	1238	1054	199	31	17	8	4.36	4.42	

【Q14】で授業への出席率の高い群(5・4)の回答分布

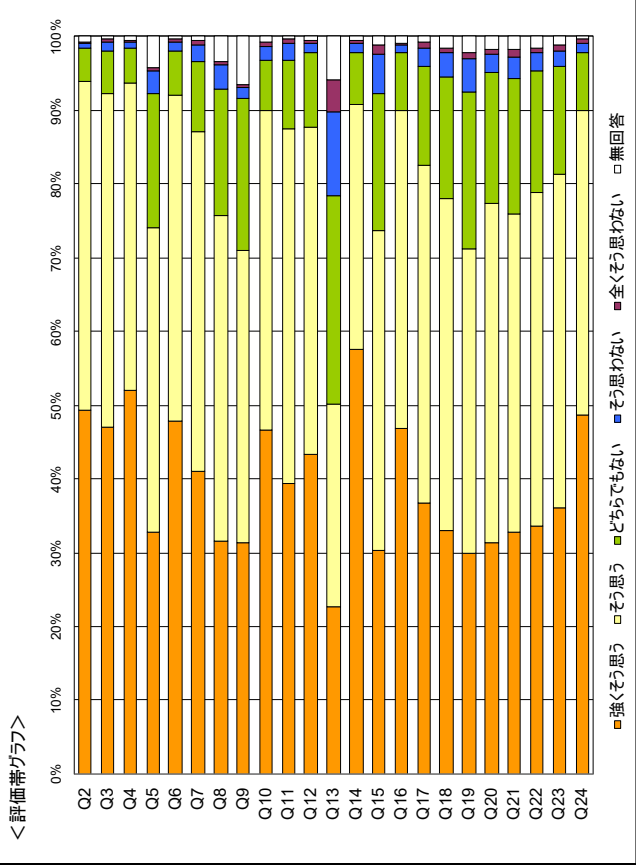
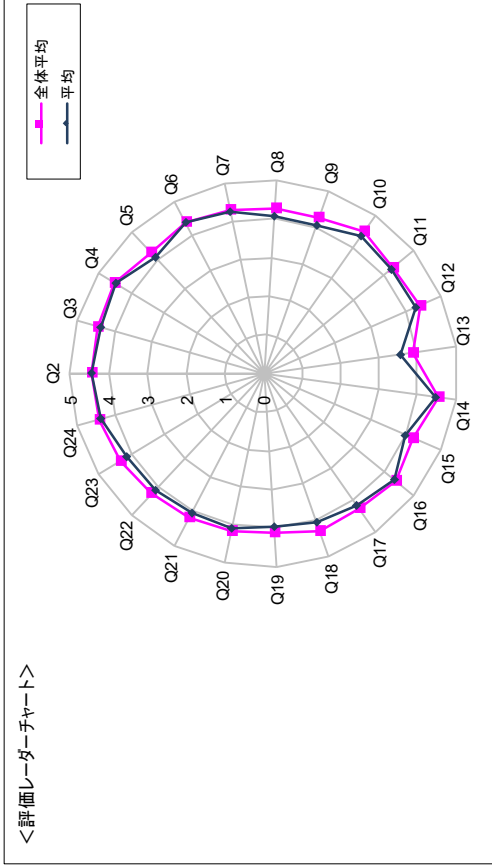
	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	1158	1039	88	19	7	1	4.44
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	808	968	373	61	9	93	4.13
Q6.教材が理解に役立った	1179	1008	98	21	5	1	4.44
Q7.説明がわかりやすかった	1022	1064	170	39	11	6	4.32

【Q14】で授業への出席率の低い群(3・2・1)の回答分布

	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	39	114	57	9	3	1	3.80
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	29	78	90	17	2	7	3.53
Q6.教材が理解に役立った	42	114	51	11	4	1	3.81
Q7.説明がわかりやすかった	26	102	74	16	5	0	3.57

図 1 ②メディア授業(遠隔オンデマンド)のみ

2024年度通期 和洋女子大学

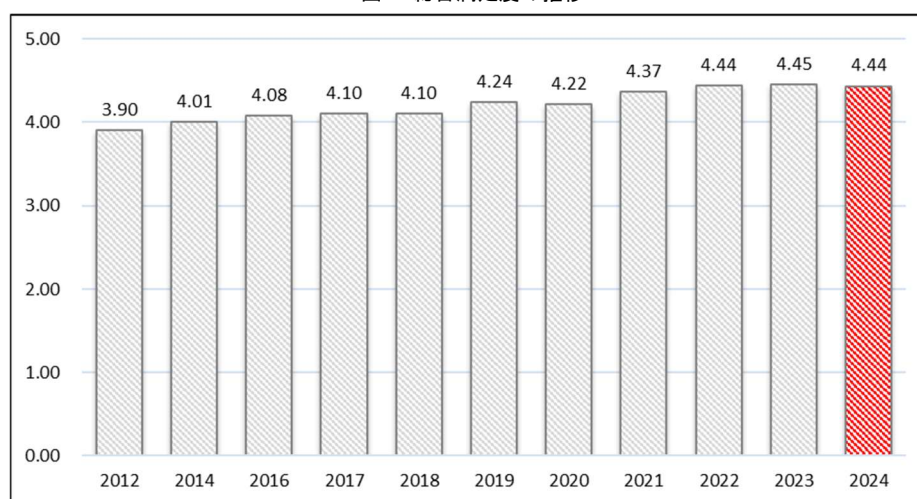


調査対象科目の履修者数は 46,266 名、回収数は 24,153 名、回収率は 52%であり、前年度 (58%) を下回った。授業形態は「対面授業のみ」89.5%、「メディア授業(遠隔オンデマンド)のみ」10.5%であった。

全質問項目 (Q2～Q24) の評価値は 3.77～4.52 の範囲に収まり、前年度と比較して多くの項目でわずかながら上昇が見られた。特に「Q14 よく出席・参加した」は評価値 4.52 で、前年 (4.53) とほぼ同水準を維持した。一方、「Q13 積極的に意見や質問をした」は依然として全項目中で最も低い評価 (3.77) であり、前年 (3.78) とほぼ同等である。

総じて、自己学習の時間 (Q15 : 4.10) は前年 (4.07) より向上し、出席・参加も良好であったが、「積極的に意見を言ったり質問をすることはしない」という学生像には大きな変化は見られなかった。「Q24 授業の総合的満足度」は前年 (4.45) から (4.44) へとわずかに低下したものの、2012 年度 (3.90) からの長期的な上昇傾向は継続しており、教育の質向上が評価されている。一方で、低評価項目への継続的な改善が求められる。

図 2 総合満足度の推移



1) 教員の授業設計と運営について

教員の授業設計と運営についての質問項目は、Q2～Q12 である。

① 知的刺激

学生の知的好奇心を刺激する授業内容については、「Q3 内容は知的刺激に富んでいた」(4.43)、「Q4 新しい知識・技術を学べた」(4.50)、「Q6 教材が理解に役立った」(4.39)、「Q11 運営時間・学習量が適切だった」(4.31)と、概ね高評価であった。「Q17 さらに勉強したくなった」は(4.22)で、前年(4.23)とほぼ同水準にとどまり、授業中の知的刺激が学習意欲を十分に引き出すには至っていない可能性がある。

② 方法・スキル

教授方法・スキルに関する設問では、「Q5 学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」(4.28)、「Q7 説明がわかりやすかった」(4.30)、「Q8 質問できる時間や環境があった」(4.28)、「Q9 質問への対応が適切だった」(4.28)、「Q10 出席確認の方法が適切だった」(4.49)など、教員の授業運営スキルが高く評価されている。「Q12 教員の熱意を感じた」(4.41)も前年(4.42)とほぼ同水準で、対面授業の影響も含めて肯定的な評価が続いている。

③ 授業の進め方

授業の進行に関する評価では、「Q2 シラバスに沿っていた」(4.47)、「Q11 運営時間・学習量が適切だった」(4.31)と、前年と同等かやや上昇しており、授業設計の妥当性が認められている。

④ 主体的な学びの促進

大学教育においては、学生が自ら課題を見出し、考え、行動する「主体的な学び」の姿勢を育むことが重要である。しかし近年、大学のユニバーサル化が進む中で、目的意識が希薄化し、受動的な学習態度が課題として指摘されている。こうした背景を踏まえ、2024年度の授業評価アンケートでは、学生の主体性を測る複数の設問を通じて、授業がどの程度その促進に寄与しているかを検証した。

特に関連性の高い設問は以下の通りである：

- ・ Q3「この授業の内容は知的刺激に富んでいた」(4.43)
- ・ Q9「教員の質問への対応が適切だった」(4.28)
- ・ Q13「自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」(3.77)
- ・ Q15「この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」(4.10)
- ・ Q17「この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」(4.22)

これらの項目の評価値は、前年と比較して大きな変動はないものの、全体的に安定した水準を維持している。特に「Q13 積極的に意見や質問をした」は依然として全項目中で最も低い評価であり、学生が授業中に能動的に発言・質問する姿勢には課題が残っている。一方で、「Q15 自己学習時間」は2019年度以前の調査では平均値が2.0未満であったが、2024年度は4.10と大きく改善されており、授業外での学習時間の確保が進んでいることがうかがえる。また、「Q17 さらに勉強したくなった」は4.22と高評価であり、授業が新たな関心を喚起する契機となって

いることが示されている。これは、「Q3 知的刺激に富んでいた」との関連性が高く、授業内容が学生の知的好奇心を刺激することで、学習意欲の向上につながっていると考えられる。

主体的な学びを支える環境要因として、教員の熱意も重要な要素である。「Q12 教員の熱意を感じた」は4.41と高評価であり、2021年度(4.35)、2022年度(4.41)から継続的に向上している。対面授業の比率が高まったことも影響している可能性があるが、教員の情熱が学生に伝わっていることは、主体性の育成において肯定的な要因といえる。

総じて、2024年度の結果からは、授業内容や教員の関与が学生の主体的な学びを一定程度促進していることが読み取れる。ただし、授業中の発言や質問といった直接的な能動性には依然として課題があり、今後は授業設計や評価方法の工夫を通じて、学生が安心して意見を述べられる環境づくりが求められる。主体的な学びの定着には、教員の働きかけとともに、学生自身の意識改革を促す教育的支援が不可欠である。

2) 出席率の高低群と授業評価について

本項では、授業への出席・参加率の高低によって学生が授業をどのように評価しているかを分析する。特に、教員の授業方法や教材の有効性、説明の明瞭さ、知的刺激の有無といった項目に着目し、出席率の高い群と低い群の評価傾向を比較した。

分析対象とした設問は以下の4項目である：

Q3「この授業の内容は知的刺激に富んでいた」

Q5「教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」

Q6「教材（配布資料、動画、音声、パワポなど）が理解に役立った」

Q7「教員の説明がわかりやすかった」

これらは、授業の質を左右する重要な要素であり、学生の出席・参加状況が評価にどのような影響を与えているかを示す指標となる。

2024年度の調査結果では、出席・参加率の高い学生(Q14で5・4を選択)は、いずれの項目においても平均評価が4.4前後と高く、授業内容や教員の対応に対して肯定的な評価を示している。特に「Q3 内容は知的刺激に富んでいた」では、出席率の高い群が4.52という高評価を示し、授業が学習意欲を喚起するものであったことがうかがえる。一方、出席率の低い群(Q14で3・2・1を選択)では同項目の評価が3.48にとどまり、1.04ポイントの差が生じている。

さらに顕著な差が見られたのは「Q7 教員の説明がわかりやすかった」である。出席率の高い群では4.42と高評価であったのに対し、低い群では3.01と大きく下回り、1.41ポイントの差が確認された。これは、授業に継続的に参加することで教員の説明の意図や構造を理解しやすくなる一方、断続的な参加では理解が追いつかず、授業の質そのものが低く感じられる可能性を示唆している。

「Q5 教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」では、出席率の高い群が4.40、低い群が3.08であり、1.32ポイントの差が見られた。これは、教員が学生の反応を踏まえて授業を調整しているにもかかわらず、出席率の低い学生にはその配慮が十分に伝わっていないことを示している。

「Q6 教材が理解に役立った」についても、出席率の高い群が4.48、低い群が3.43であり、1.05ポイントの差が生じている。教材の活用は授業の理解を補完する重要な要素であるが、継続的な出席がなければ教材の意図や活用方法を十分に把握できず、効果が限定的になることが

考えられる。

これらの結果から、出席・参加率の高い学生は授業の構成や教員の対応、教材の有効性に対して肯定的な評価を示しており、授業への積極的な関与が学習効果を高めていることがうかがえる。一方、出席率の低い学生は、授業の質に対する評価が全体的に低く、前年と比較してもその傾向が強まっている。2023 年度においては、出席率の高低による評価差は概ね 0.56～0.59 ポイントであったが、2024 年度では 1.04～1.41 ポイントと差が拡大しており、授業への継続的な参加が学習体験の質に大きく影響していることが明らかとなった。

本学では「きめ細かな指導」を教育の柱の一つとして掲げており、出欠調査を通じて欠席傾向のある学生への個別指導を継続して行っている。また、メディア授業(遠隔オンデマンド)においても参加状況を把握し、参加が不十分な学生には個別に参加を促す対応を行っている。今後は、出席率の低い学生に対する支援策をさらに強化し、授業への関与を促進することで、学習効果の向上と教育の質の均質化を図る必要がある。学科別の出席・参加率については次項(2)の表 4-1・4-2 を参照。

表 1 出席率による評価

評価項目	出席・参加率 が高い群	出席・参加率 が低い群	差
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	4.52	3.48	1.05
Q5.理解度を考慮しながら授業を進めた	4.40	3.08	1.32
Q6.教材(配布資料、動画、音声、パワポなど)が理解に役立った	4.48	3.43	1.05
Q7.説明がわかりやすかった	4.42	3.01	1.42

3) 授業形態別による評価

①授業形態について

2024 年度の授業形態は、「対面授業のみ」が 89.5%、「メディア授業(遠隔オンデマンド)のみ」が 10.5%であり、前年(対面 88.0%、遠隔 12.0%)と比較して対面授業の比率がやや増加した。これは、COVID-19 後の授業体制が安定し、対面授業への回帰が進んでいることを示している。授業評価アンケートの結果を見ると、全体の平均評価値は Q2～Q24 の各項目で 3.77～4.52 の範囲に収まり、概ね高い水準を維持している。特に「Q14 よく出席・参加した」(4.52)、「Q4 新しい知識・技術を学べた」(4.50)、「Q10 出席確認の方法が適切であった」(4.49)など、授業への参加状況や学習成果に関する項目で高評価が得られている。

また、「Q24 授業の総合的満足度」は 4.44 と、前年(4.45)とほぼ同水準であり、授業形態の変化が学生の満足度に大きな影響を与えていないことがうかがえる。これは、対面授業・遠隔授業を問わず、授業設計や教員の対応が一定の質を維持していることを示している。

一方で、授業形態の違いによる評価傾向を詳細に分析するためには、今後の調査設計において授業形態別の評価値を明示する必要がある。現時点では、授業形態の比率と全体評価の関係性を概観するととどまるが、授業形態の選択が学生の学習体験に与える影響をより精緻に把握するためのデータ整備が求められる。

②学科別の授業形態比率

2024年度の学科別授業形態を見ると、共通科目を除くほとんどの学科で「対面授業のみ」が90%以上を占めており、対面中心の授業体制が継続している。具体的には、日本文学文化学科(99.7%)、心理学科(92.1%)、こども発達学科(99.5%)、健康栄養学科(99.6%)、看護学科(99.6%)など、専門性の高い学科ほど対面授業の比率が高い傾向が見られる。

これは、実習や演習を含む授業が多く、対面での指導が不可欠であることを反映している。また、英語コミュニケーション学科(99.4%)や国際学科(99.3%)など、言語運用やディスカッションを重視する学科においても対面授業が主流であり、対話的な学習環境の維持が重視されていることがうかがえる。

一方、共通科目では「メディア授業(遠隔オンデマンド)のみ」が51.5%と半数を超えており、汎用的な内容や大人数対象の授業においては、遠隔形式が定着している。これは、学習の効率化や時間的制約の緩和を目的とした授業設計が進んでいることを示している。

今後は、学科の特性に応じた授業形態の最適化を図るとともに、遠隔授業においても対面授業と同等の教育効果を得られるよう、教育技術の活用と学習支援の充実が求められる。授業形態の選択が学生の学習成果に与える影響について、継続的な検証と改善が必要である。

表2 学科別授業形態

	授業形態(%)					回答数 (名)
	対面のみ	対面と遠隔	メディア授業(遠隔リアルタイム)有り	メディア授業(遠隔オンデマンド)のみ	その他	
共通科目	48.5%	0.0%	0.0%	51.5%	0.0%	4,094
共通科目(外国語)	99.8%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	1,576
共通科目(資格)	99.9%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	1,050
日本文学文化学科	99.7%	0.0%	0.0%	0.3%	0.0%	1,916
心理学科	92.1%	0.0%	0.0%	7.9%	0.0%	1,843
こども発達学科	99.5%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	1,957
英語コミュニケーション学科	99.4%	0.0%	0.0%	0.6%	0.0%	533
国際学科	99.3%	0.0%	0.0%	0.7%	0.0%	539
服飾造形学科	99.7%	0.0%	0.0%	0.3%	0.0%	1,179
健康栄養学科	99.6%	0.0%	0.0%	0.4%	0.0%	4,393
家政福祉学科	99.7%	0.0%	0.0%	0.3%	0.0%	1,584
看護学科	99.6%	0.0%	0.0%	0.4%	0.0%	2,783
全体(学部共通除く)	90.1%	0.0%	0.0%	9.9%	0.0%	23,447
全体	89.5%	0.0%	0.0%	10.5%	0.0%	24,153

③授業形態による評価の違いの傾向と遠隔授業の課題

2024年度の授業形態は、「対面授業のみ」が89.5%、「メディア授業(遠隔オンデマンド)のみ」が10.5%であり、前年と比較して対面授業の比率がやや増加した。これは、COVID-19後の授業体制が安定し、対面形式への回帰が進んでいることを示している。

授業評価アンケートの結果を見ると、全体の平均評価値はQ2～Q24の各項目で3.77～4.52の

範囲に収まり、授業形態の違いによる大きな評価のばらつきは見られなかった。「Q24 授業の総合的満足度」は 4.44 と前年（4.45）とほぼ同水準であり、授業形態の変化が学生の満足度に大きな影響を与えていないことがうかがえる。これは、対面・遠隔を問わず、授業設計や教員の対応が一定の教育水準を維持していることを示している。

一方で、授業形態による学習体験の質的な違いは、学生の主体的な学びやコミュニケーションのあり方に影響を及ぼす可能性がある。特にメディア授業（遠隔オンデマンド）では、ICT 環境の整備状況や学習者のデジタルリテラシーに依存する部分が大きく、学習の質にばらつきが生じる懸念がある。たとえば、「Q13 積極的に意見や質問をした」（3.77）や「Q17 さらに勉強したくなった」（4.22）といった項目は、アクティブラーニングや PBL（課題解決型学習）を取り入れた授業であれば、より高い評価につながる可能性があるが、遠隔形式ではその実施が難しい場合もある。

遠隔授業においては、教員と学生の双方向的なやり取りが制限されることから、学習意欲の維持や理解度の確認が課題となる。特に、「Q8 教員へ質問できる時間や環境があった」（4.28）や「Q9 教員の質問への対応が適切だった」（4.28）といった項目は、対面授業に比べて遠隔授業では学生の体感が異なる可能性がある。こうした課題に対しては、ICT を活用したインタラクティブな教材設計や、LMS（学習管理システム）を通じたフィードバック機能の強化が求められる。また、アクティブラーニングや PBL の導入は、学生の主体性を引き出す有効な手法であるが、遠隔授業ではその実施に工夫が必要である。グループワークやディスカッションをオンラインで円滑に進めるためには、通信環境の安定性やツールの操作性、教員のファシリテーション能力が重要となる。

本学では、遠隔授業においても参加状況の把握や個別対応を継続して行っており、欠席傾向のある学生には個別に参加を促すなど、きめ細かな指導を実施している。今後は、対面授業と遠隔授業のそれぞれの特性を活かしながら、ICT 環境の整備と教育技術の向上を通じて、教育効果の均質化を図ることが求められる。特に、遠隔授業においては「孤立させない学び」の設計と、アクティブな学習参加を促す仕組みづくりが重要である。

表 3 授業形態による評価

質問項目	授業形態					全体平均
	対面のみ	対面と遠隔	メディア授業(遠隔リアルタイム)有り	メディア授業(遠隔オンデマンド)のみ	その他	
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	4.44	0.00	0.00	4.38	0.00	4.43
Q13.積極的に意見や質問をした	3.80	0.00	0.00	3.56	0.00	3.77
Q14.よく出席・参加した	4.53	0.00	0.00	4.47	0.00	4.52
Q15.自己学習の時間を確保した	4.12	0.00	0.00	3.97	0.00	4.10
Q17.さらに勉強したくなった	4.23	0.00	0.00	4.16	0.00	4.22
Q18.学びの目標達成に近づいた	4.28	0.00	0.00	4.08	0.00	4.26
Q24.授業の総合満足度	4.44	0.00	0.00	4.36	0.00	4.44

（２）授業の総合満足度からみた今後の課題

2024 年度の授業評価アンケートにおける「Q24 授業の総合的満足度」は、平均評価値 4.44 であり、前年（4.45）とほぼ同水準を維持した。2012 年度の評価値（3.90）から年々上昇傾向にあることは、大学教育の質向上が着実に進んでいることを示しており、一定の成果として評価されるべきである。

一方で、総合満足度が安定しているにもかかわらず、個別項目に目を向けると、依然として改善の余地がある領域も存在する。特に「Q13 自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」は、2024 年度も全項目中で最も低い評価値（3.77）となっており、学生の能動的な関与を促す授業設計には課題が残っている。これは、アクティブラーニングや PBL（課題解決型学習）の導入が限定的であることや、発言しやすい教室環境の整備が不十分である可能性を示唆している。

また、「Q17 この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」（4.22）や「Q15 自己学習の時間を確保した」（4.10）といった項目も、一定の評価は得ているものの、授業が学生の学習意欲や自律的な学びを十分に引き出しているとは言い切れない。特に、メディア授業（遠隔オンデマンド）の比率が一定数存在する中で、ICT 環境の整備状況や学習支援の質が学生の学習体験に影響を与えている可能性がある。

さらに、出席・参加率の高低による評価の差も顕著であり、授業への継続的な参加が学習効果や満足度に直結していることが明らかとなっている。出席率の低い学生群では、教員の説明や教材の理解度に関する評価が 4.0 を下回る傾向があり、教育の均質化に向けた支援体制の強化が求められる。

加えて、授業評価アンケートの回収率にも課題が残る。2024 年度の回収率は 52%であり、前年（58%）を下回った。これは、学生のアンケート参加意識や回答環境に課題があることを示しており、教育の質保証を可視化するための基盤として、回収率の向上は喫緊の課題である。今後は、アンケートの目的や意義を学生に周知するとともに、回答の利便性を高める ICT ツールの活用や、授業内での回答時間の確保など、制度的・運用的な工夫が求められる。

今後の課題としては、以下の点が挙げられる：

- 学生の主体的な学びを促進するための授業設計の工夫（アクティブラーニング・PBL の活用）
- 発言や質問がしやすい教室環境の整備と教員のファシリテーション力の向上
- 遠隔授業における ICT 活用の高度化とインタラクティブな学習支援の充実
- 出席率の低い学生への個別対応と学習支援の強化
- 授業評価アンケートの回収率向上に向けた啓発と運用改善
- 総合満足度の安定を維持しつつ、低評価項目への継続的な改善

授業の総合満足度は、教育の質を測る重要な指標であると同時に、学生の学びの充実度を反映するものである。今後は、満足度の維持・向上に加え、学習の質的深化を目指した教育改革と、評価制度の信頼性向上に向けた取り組みを継続的に推進していく必要がある。

表 4-1 2024 年度 授業評価アンケート各項目平均(共通総合科目)

No.	設問	全体	全セ (共通)	全セ (共通外国語)	全セ (共通商経)
Q2	この授業はシラバス(変更したシラバスも含む)に沿っていた	4.47	4.47	4.43	4.51
Q3	この授業の内容は知的刺激に富んでいた	4.43	4.41	4.28	4.48
Q4	この授業で新しい知識・技術を学べた	4.50	4.50	4.29	4.57
Q5	教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた	4.28	4.22	4.33	4.31
Q6	教材(配布資料、動画、音声、パワポなど)が理解に役立った	4.39	4.41	4.24	4.44
Q7	教員の説明がわかりやすかった	4.30	4.34	4.20	4.34
Q8	教員へ質問できる時間や環境があった	4.28	4.22	4.30	4.28
Q9	教員の質問への対応が適切だった	4.28	4.23	4.26	4.27
Q10	出席確認の方法が適切であった	4.49	4.42	4.46	4.52
Q11	この授業の運営時間、学習量が適切だった	4.31	4.32	4.33	4.35
Q12	この授業から教員の熱意を感じた	4.41	4.35	4.40	4.53
Q13	自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした	3.77	3.66	3.91	3.79
Q14	この授業はよく出席・参加した	4.52	4.52	4.50	4.53
Q15	この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した	4.10	3.95	4.10	4.10
Q16	この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ	4.39	4.38	4.35	4.42
Q17	この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった	4.22	4.19	3.98	4.30
Q18	この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた	4.26	4.14	4.03	4.37
Q19	この授業により、「自分を誇り誇りを持つ力」が向上した	4.04	4.00	3.90	4.04
Q20	この授業により、「基礎学力と文章力」が向上した	4.13	4.11	4.13	4.13
Q21	この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した	4.10	4.08	4.00	4.15
Q22	この授業により、「課題を解決する力」が向上した	4.18	4.15	4.03	4.25
Q23	この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した	4.26	4.19	3.99	4.38
Q24	あなたのこの授業に対する総合的な満足度を示してください	4.44	4.46	4.37	4.46
	回収率 (%)	52%	42%	62%	57%

表 4-2 2024 年度 授業評価アンケート各項目平均(専門科目)

No.	設問	全体	日文	心理	こども	英コミ	国際	服飾	健康	家福	看護
Q2	この授業はシラバス(変更したシラバスも含む)に沿っていた	4.47	4.48	4.54	4.45	4.61	4.51	4.55	4.42	4.50	4.43
Q3	この授業の内容は知的刺激に富んでいた	4.43	4.46	4.48	4.46	4.63	4.48	4.56	4.37	4.47	4.42
Q4	この授業で新しい知識・技術を学べた	4.50	4.50	4.57	4.52	4.68	4.51	4.65	4.44	4.53	4.50
Q5	教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた	4.28	4.28	4.29	4.35	4.58	4.39	4.37	4.18	4.33	4.31
Q6	教材(配布資料、動画、音声、パワポなど)が理解に役立った	4.39	4.41	4.43	4.38	4.58	4.50	4.41	4.33	4.45	4.38
Q7	教員の説明がわかりやすかった	4.30	4.30	4.28	4.32	4.57	4.38	4.38	4.19	4.37	4.31
Q8	教員へ質問できる時間や環境があった	4.28	4.30	4.38	4.31	4.59	4.30	4.43	4.17	4.29	4.27
Q9	教員の質問への対応が適切だった	4.28	4.31	4.36	4.30	4.63	4.34	4.46	4.15	4.32	4.29
Q10	出席確認の方法が適切であった	4.49	4.50	4.50	4.50	4.66	4.53	4.61	4.48	4.55	4.49
Q11	この授業の運営時間、学習量が適切だった	4.31	4.33	4.38	4.32	4.52	4.45	4.34	4.21	4.36	4.27
Q12	この授業から教員の熱意を感じた	4.41	4.47	4.45	4.46	4.62	4.55	4.51	4.30	4.47	4.43
Q13	自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした	3.77	3.71	3.60	3.88	4.29	3.86	3.91	3.65	3.83	3.93
Q14	この授業はよく出席・参加した	4.52	4.49	4.51	4.56	4.65	4.47	4.51	4.51	4.52	4.55
Q15	この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した	4.10	3.97	3.99	4.23	4.37	4.08	4.20	4.14	4.16	4.22
Q16	この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ	4.39	4.33	4.38	4.43	4.58	4.46	4.38	4.34	4.46	4.42
Q17	この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった	4.22	4.18	4.26	4.31	4.49	4.28	4.35	4.12	4.33	4.29
Q18	この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた	4.26	4.17	4.31	4.38	4.48	4.30	4.38	4.26	4.36	4.33
Q19	この授業により、「自分を誇り誇りを持つ力」が向上した	4.04	3.88	4.09	4.14	4.33	4.18	4.09	3.92	4.19	4.15
Q20	この授業により、「基礎学力と文章力」が向上した	4.13	4.15	4.15	4.20	4.47	4.30	4.08	4.03	4.20	4.17
Q21	この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した	4.10	4.05	4.23	4.26	4.40	4.24	4.08	3.90	4.23	4.19
Q22	この授業により、「課題を解決する力」が向上した	4.18	4.03	4.26	4.30	4.39	4.29	4.26	4.10	4.27	4.23
Q23	この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した	4.26	4.03	4.35	4.39	4.44	4.33	4.34	4.24	4.38	4.35
Q24	あなたのこの授業に対する総合的な満足度を示してください	4.44	4.49	4.50	4.45	4.60	4.44	4.57	4.31	4.51	4.42
	回収率 (%)	52%	43%	50%	73%	49%	48%	64%	60%	58%	48%

1) 共通総合科目(全学教育センター)の課題 (全学教育センター長 鬘谷要)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

まず、2024 年度の全学教育センターでは、総合満足度 (Q24) は前年から小幅に低下したものの、依然として大学全体平均 (4.44) を上回り、共通総合科目は 4.46 で推移した。設問別に大学平均との差を見ると +0.04~−0.15 の範囲に収まり、概ね肯定的評価が継続しているとみてよい。

ここ 3 年間 (2022~2024) の全学教育センター3 群 (共通、外国語、資格) の推移を概観すると、共通は 2022→2023 で改善後、2024 でわずかに反落 (4.47→4.46) するも高位安定圏を維持した。外国語は 2023→2024 で 4.39→4.37 と下押し、資格も 4.49→4.46 と小幅マイナスで、前年の回復基調に一服感がみられる。分野横断で確認すると、共通で顕著な高値となったのは Q14 (出席・参加 4.52)、Q4 (新しい知識・技術 4.50)、Q2 (シラバス順守 4.47)、Q10 (出席確認 4.42)、そして総満足度 Q24 であった。授業運営や構造の安定、提供内容の明確さが評価を支えていると解される。

一方、共通で恒常的に相対的低値を示すのは Q13 (主体的意見・質問 3.66)、Q15 (授業外学習時間 3.95)、Q19 (自分を知り誇りを持つ力 4.01) で、能動性・自己内省型の学修指標が依然弱い。汎用的学修成果を問う Q18 (大学での学びの目標達成 4.14)、Q22 (課題解決力 4.15) も 4 点前半にとどまり、授業で得た学びを他領域・将来計画へ橋渡しする段階に課題が残る。

外国語では出席確認 (Q10 4.46) や出席・参加 (Q14 4.50) など運営面は高水準を保ったが、教材の理解支援 (Q6 4.24) と主体的発言 (Q13 3.91) が前年より明確に後退し、対面比率上昇に学習設計が追随していない可能性が指摘される。資格では前年高騰した総合満足度が 4.46 へ反落し、出席 (Q14 4.53) が低下した一方、自己学習 (Q15 4.10) はおおむね横ばい圏にとどまった。知識・技能獲得や受講管理関連の項目は高評価で推移する一方、主体的発言や授業外学習など学修プロセス面の指標は伸び悩んでおり、学修プロセス全体の質的保証という観点から再検討が必要である。

総じて、授業運営・教員努力・教材整備に対する信頼は維持されているが、学生側の主体的学修・授業外取組・学びの汎用化といった上位層成果指標で伸び悩みが見られることが、2024 年度データの大きな示唆である。

②今後の課題

2024 年度は設問単位で見ればおおむね高評価を維持したが、総合満足度はいずれの群も前年比で小幅下落し、特に「主体的発言」(Q13)「授業外学習」(Q15) など能動性指標の低位が改善しない。共通総合科目は学部横断的教養形成・学び間接続・自己理解を狙う科目群であるにもかかわらず、現行評価票は専門科目前提の設計色が濃く、こうした価値を十分に拾えていない可能性がある。学生が「なぜ学ぶのか」「他科目・将来とどうつながるか」を実感できる仕掛けが不可欠であり、授業外準備課題の明示、小規模発表・ピア質問の定着、オンライン補助教材と出席・課題提出履歴を連結した学修ログ可視化を組み合わせ、参加→準備→発信→内省の循環を授業設計側から意図的に生み出したい。あわせて外国語には使用場面重視のタスク型学修を、資格には中間マイルストーンと即時フィードバック (弱点提示) を導入し、知識・技能獲得指標と学修プロセス指標 (主体的発言・授業外学習等) のギャップを縮める設計を図るとともに、各分野の行動データを全学教育センター共通基盤で横展開することで、満足度と学修

成果の双方を底上げすることが次年度の重点課題となろう。

2) 日本文学文化学科の専門科目の課題 (学科長 佐藤勝明)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

2024年度の授業評価アンケートにおいて、Q24 総合的な満足の数値は、全体が 4.44 であるのに対して、本学科は 4.49。全学平均をやや上回ったということで、それは過去 3 年の数値でも変わらない。また、個別の質問で全体を上回ったのは、Q2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・20 においてであり（これらは、数値の点でも、Q20 を除くとすべて 4.28 を超えている）、この点も過去 3 年の結果とおおむね重なっている。つまり、少なくともこの 4 年間に於いて、学生の本学科の授業に対する評価はほぼ一定であった、ということになる。その評価をまとめて言えば、本学科の教員は、学生が新たな知識・技術等を学ぶにふさわしい教材を使い、運営時間にも気を配り、わかりやすい説明を心掛けつつ、熱意をもって知的刺激に富んだ授業を行っており、それはシラバスに沿っていながら、学生の理解・反応にも即応する体のものである、ということになろう。各教員の授業に対する取り組みが正当に評価されたものとして、まずは素直に喜ぶことにしたい。シラバス執筆の段階から、各自が前年度の反省をいかし、学生主体の授業を心掛け、よりよい案を練り上げてきた成果が、こうした学生の評価に結び付いたものと考えられる。シラバスの校正（全体を通読する立場にある学科長による講評など）を通して、そうした努力のベクトルが皆に共有されていることも、学生の満足度につながる要因の一つと考える。

②今後の課題

上記とは逆に、個別の質問で全体を下回ったのは、Q13・14・15・16・17・18・19・21・22・23 においてであり、これも過去 3 年の数値と大きく変わるところがない。中でも 4.00 を下回った Q13 (学生自身の積極的な意見・質問) の 3.71 と Q19 (自己を知り誇りを持つ) の 3.88 は、要検討事項ということになる。学生の能動的な取り組みを促すべく、各教員は工夫を重ねているところながら、それが主体的な意見・質問という形になっていないことは、真摯にその結果を受け止め、学科 FD などでの問題を取り上げるなど、全体で取り組むようにしていきたい。後者に関しては、授業を通して各自が自分の尊厳に気づいて自信を持つとはどういうことなのか、そのためには教員自身のどういう認識が必要なのかを、じっくり考え、あるいは話すことから、始めなければならないと考える。さらに、Q21 (理解・表現力)・22 (課題解決力)・23 (社会に役立つ専門力) が、かろうじて 4.00 を超える程度であることにも、危機感を抱かなければならない。“ことば・文字・表現を専門的に学ぶ学科”であり、“ことば・文字・表現を通して社会に関わる力を身につける学科”であることを標榜する本学科として、その目的意識が学生にはうまく伝わっていないということであり、また、現行の授業ではその成果が十分に達成できていないということだからである。文学・芸術の作品を主たる材料に授業を設計している本学科の場合、実学的な意味での「社会に役立つ」が実感しにくいのはその通りとしても、そこで思考放棄するのではなく、実学的な次元とは別に、真に「社会に役立つ」とはどういうことなのかを改めて問う必要がある、ということなのだと考える。重く受けとめ、取り組みを始めていきたい。

3) 心理学科の専門科目の課題 (学科長 小沢哲史)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

心理学科の授業の総合満足度(Q24)は「4.50」であり、2023年度の4.49をわずかに上回ることができた。授業評価アンケートの各項目において、特に全体平均より高い評価を得ていたのは、「Q21. この授業により、『人を理解し自分を表現する力』が向上した」(全体平均4.10、心理学科4.23)、「Q19. この授業により、『自分を知り誇りを持つ力』が向上した」(全体平均4.04、心理学科4.09)、「Q22. この授業により、『課題を解決する力』が向上した」(全体平均4.18、心理学科4.26)。「Q23. この授業により、『社会に役立つ専門力』が向上した」(全体平均4.26、心理学科4.35)であった。心理学科のディプロマ・ポリシーである「事実を知るためのデータを適切に収集し分析する力、人と人の関係を円滑にするコミュニケーション力、人の心の基礎を理解し人を支える力を身につけている」、「論理的な説明力、文章力、発表力をもとに議論する技術を学び、社会人の基礎となる力を身につけている」などに対応した教育成果がみられた。このように授業が自身を成長させる場であることを学生が認識していることが継続して示された。

また、「Q8. 教員へ質問できる時間や環境があった」は全体平均4.28に対して心理学科では4.38、「Q9. 教員の質問への対応が適切であった」は全体平均4.28に対して4.36であり高い評価を得ていた。授業評価に及ぼす要因としてクラスサイズ(履修人数)が想定されるが、2024年度の授業形態は「対面のみ」が92.1%となり、2022年度の68.9%、2023年度の90.2%に比べて多くなっている。心理学科では全学対象のピアヘルパー資格を遠隔授業として開講しており、他学科の学生も多く履修している。このような状況の中で、学科で連携して、一人ひとりの学生への丁寧な対応を継続することができたと考えられた。

他方で、「Q13. 自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」は、全体平均3.77に対して心理学科では3.60であり評価が下回っていた。このことは心理学科に進学する学生が恥ずかしさを感じやすい傾向によるものである可能性がある。

②今後の課題

心理学科では、来年度から新カリキュラムが始まるが、現カリキュラムの学生が卒業まで安心して学び続けることができるように履修指導を行う。さらに、授業が自身を成長させる場であることを学生たちが認識しているという授業評価の結果をフィードバックすることで、学生の主体的な学びを促すことにもつながると考えられる。このことに、学習成果の可視化という観点からも継続して取り組んでいく。

また教員のうち2名が退職ないし移籍する一方で、3名の教員が新たに着任する予定であり、心理学科のこれまでの良さを維持しつつ、さらに発展・展開できるよう教職員一同で取り組む。

最後に、授業評価アンケートの心理学科の回収率は50%であり、2023年度57%、2022年度54%よりいくらか下落した。全体平均も52%と下落していた。授業評価アンケートの回収率の向上も課題である。

4) こども発達学科の専門科目の課題 (学科長 大神優子)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

2024年度授業アンケートの各項目を全体平均と比較すると、誤差の範囲の僅差も含めて、23

項目中 21 項目が全体平均を上回っていた。総合満足度は 4.45 であり、他学科と比較して特筆して高いとは言えないが、免許・資格関連の必修科目が多い学科としては健闘しているといえる。

全体平均をわずかながら下回った項目は、Q2「この授業はシラバス（変更したシラバスも含む）に沿っていた」（全体が 4.47、本学科は 4.45）、Q6「教材（配布資料、動画、音声、パワポなど）が理解に役立った」（全体が 4.39、本学科は 4.38）の 2 項目であった。昨年度全体平均を下回っていた Q13「自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」は、3.66→3.75→3.88 と、この 3 年間で伸びが大きく、全体平均(3.77)を上回る結果となった。Q15「この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」も同様に上昇傾向（4.10→4.17→4.23）であった。

全体平均を比較的大きく（0.1 以上）上回った項目としては、これら 2 項目の他、Q18「この授業により、自身の大学での学びの目標に近づいた」、Q19「この授業により、『自分を知り誇りを持つ力』が向上した」、Q21「この授業により、『人を理解し自分を表現する力』が向上した」、Q22「この授業により、『課題を解決する力』が向上した」、Q23「この授業により、『社会に役立つ専門力』が向上した」であり、「基礎学力と文章力」を除く大学における専門性に関わる項目群であった。

学生が自己学習の時間を確保しながら授業に積極的に参加したことが専門性の向上に結びついたと考えられ、学生自身の取り組みと、それを促す教員の尽力の結果と考える。

②今後の課題

本学科の回収率は、全体平均が 52%であるのに対して、73%であり、昨年度の 80%を下回ったものの、安定して高い。対面授業内で確実に回答時間を確保しているだけではなく、高い出席率によるものと考えられる。ただし、近年、途中で出席しなくなる学生が目立つようになってきた。こうした学生は、複数の科目で出席及び成績不振になりがちである。担任を中心に、学科会議やわよ Jam 等を通して各科目の状況を把握し、単独科目に留まらないサポートが必要である。

5) 英語コミュニケーション学科の専門科目の課題（学科長 星野文子）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

総合的な満足度について、2022 年度以来 3 年目の全学科の中で 1 位となったことは、喜ばしい。近年、英語という言葉や科目の人気の激減している傾向は、本学科の受験者数減にも数字に如実に表れている。しかし、本学科の学生たちが、英語や英語圏に関連する授業に意義を感じており、学意欲を高めていることは喜びである。Q3「授業内容は知的刺激に富む」という問いへの評価が高いことや、Q16「この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ」、Q17「この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」の部分に現れていると思われる。今年度（2025 年度）より、学科では“English for Better Life”というコンセプトを掲げているが、これは学科の実態をフレーズに収めたものであり、学生たちはこちらの意図を汲んでくれていたように思われる。

また、本学科の魅力を在学生に問うと、小規模の学科ならではの良さとして、教員が学生に寄り添ってくれると回答しているが、今回もこの要素が結果に反映されているのではないか

と考える。とりわけ、2024 年度も Q8「教員へ質問できる環境」、Q9「教員の質問への対応」、Q12「この授業から教員の熱意を感じた」などの数値が高いのは、教員の姿勢を学生たちが認めてくれている証ある。このような総合的な満足度については、オープンキャンパスでの学科紹介でも引き続き来場者に伝えていく所存である。

同時に、学科の専門科目として取り組んでいくべき項目には、Q19「この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた」や、Q22「この授業により、『課題を解決する力』が向上した」などがある。また、Q15「この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」についても、他項目と比較すると低い数値である。学科の学びの更なる充実を目指し、今後も、在学生と共に常に学び続けていく学科でありたいと考える。

②今後の課題

ここ数年の課題であるが、アンケートの回収率を 80%以上に引き上げることである。同時に、今後も引き続き、アンケートを回答していない学生たちが半数近くいることを意識し、日頃から学生たちのフィードバックには敏感に反応し、より良い授業を展開できるように心がけていきたいと思う。授業の質を上げ、在学生の学びをより充実したものにすることが、最終的には受験者数増加にも欠かせないと考えている。

6) 国際学科の専門科目の課題 (学科長 金丸裕志)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

国際学科の専門科目全体の授業評価アンケート結果について、その総合満足度をみると、「Q24 授業の総合満足度」の項目は通年・前期科目で 10 番目、後期科目で 5 番目の高さとなっている。総合では 4.44 で全学の平均値と同じになっている。ただし各項目を見てみると、全体の平均値を下回った項目は「Q14 よく出席・参加した」「Q15 予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」の 2 つのみでそのほかはすべて全体平均を上回っている。

また国際学科の専門科目の中で評価の高かったものは「Q12 教員の熱意を感じた」「Q10 出席確認の方法が適切であった」「Q2 シラバスに沿っていた」「Q4 新しい知識・技術を学べた」「Q6 教材（配布資料、動画、音声、パワポなど）が理解に役立った」「Q3 内容は知的刺激に富んでいた」といった項目。ただしこの中には全体の評価平均も高いものがあり、全体平均と比べると、「Q12. 教員の熱意を感じた」が全体平均 4.41 に対して 4.55、「Q6 教材（配布資料、動画、音声、パワポなど）が理解に役立った」が全体平均 4.39 に対して 4.50 と大きく上回っている。これらはとくに若手の教員の工夫によるものが大きいと考えられる。

対して評価の低かった項目は、「Q22 この授業により、『課題を解決する力』が向上した」「Q17 この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」「Q21 この授業により、『人を理解し自分を表現する力』が向上した」「Q19 この授業により、『自分を誇りを持つ力』が向上した」「Q15 この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」「Q13 自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」があげられる。このうち「Q15 この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」のみは全体平均を下回っているが、そのほかのものは全体平均を上回っており、よって国際学科のみならず全体でも評価が低かった項目であるといえる。

②今後の課題

今後の課題として挙げられるのはやはり、評価の低かった項目であるといえよう。なかでも「Q15 自己学習の時間を確保」や「Q13 積極的に意見や質問をした」といった項目は学生自身の学びへの積極性を示すものであると考えられ、本学の学生が自主学習や授業参加に消極的であるという傾向があるにしても、自主的に学び積極的に授業に参加する態度を養っていく必要がある。また、国際学科だけでみると全体平均を下回った2つの項目「Q14 よく出席・参加した」「Q15 予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」に関して改善の余地が大いにある。とくに「Q14 よく出席・参加した」については上記と同様、学生自身の積極的な授業・学びへの参加にかかわる項目であり改善の必要がある。本学科での評価が高かった項目、「Q12 教員の熱意」や「Q3 知的刺激」といった部分がもっと学生の積極的・自主的な学びにつながっていく工夫を凝らす必要があるだろう。

7) 服飾造形学科の専門科目の課題 (学科長 森本美紀)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

2024年度の学科の総合的満足度は4.57と大学全体の平均4.44を0.13ポイント上回った結果となった。この状況は2021年度から続いている。その要因として考えられるのは、大学全体の平均より評価が0.13ポイント以上高い、Q3「この授業の内容は知的刺激に富んでいた」、Q4「この授業で新しい知識・技術を学べた」Q8「教員へ質問できる時間や環境があった」、Q9「教員の質問への対応が適切だった」、Q23「この授業により、『社会に役立つ専門力』が向上した」、Q17「この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」が挙げられる。Q8・Q9が高評価であったことから、教員の学生への対応や指導が十分であったと言える。

また、Q3・Q4・Q17が高評価であったことから、専門分野の教員による新規性の高い授業に積極的な取り組み、学生自身が社会に貢献できる専門技術の習得を実感できていることがわかる。

さらに総合評価と相関関係が最も高かったQ5「教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」(0.63)から、服飾造形学科の教員のきめ細かな対応と学生の習得の進捗度を踏まえた授業を展開していることが伺える。

②今後の課題

昨年の課題であった、Q20「この授業により、『基礎学力と文章力』が向上した」、Q21「この授業により、『人を理解し自分を表現する力』が向上した」については、3年連続で大学全体の平均を下回っている。2024年度も大学全体の平均を下回った。本学科の専門科目においては、実習・演習が多く、基礎学力と文章力を確認することが少ないのが現状であるが、実習・演習においても文章で表現する機会を取り入れ、学修効果を実感できる指導をしていく必要がある。

また、2023年度に大学全体の平均を若干下回っていたQ17「この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」が、2024年度は全体平均を上回ったので、学生の学修意欲を引き出し、課題やレポートに積極的に取り組むことができるよう、一人ひとりの特性や能力に適したきめ細かく丁寧な指導を継続していく。

尚、昨年課題であった回収率については、2021年度より3年連続して平均を下回っていたが、2024年度においては、64%と平均の52%を大幅に上回り、学科間で2位の結果となった。これ

は授業のフィードバック時に、学科教員の声かけによる学生への周知が徹底していた成果の現れとみなすことができる。が、引き続き回収率 90%を目指すことも学科の課題として掲げる。

8) 健康栄養学科の専門科目の課題 (学科長 杉浦令子)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

2024 年度の健康栄養学科専門科目に対する総合満足度の平均値は 4.31 であり、全体平均値 4.44 より 0.12 ポイント下回っているが、昨年度とほぼ横ばいであった。また、設問別にみても、2023 年度との比較でもすべての設問でほぼ変化はなかった。総合満足度と相関の高かった設問は、Q7「教員の説明がわかりやすかった」(0.68)、Q5「教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」(0.64)、Q11「この授業の運営時間、学習量が適切だった」および Q17「この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」(0.62)であった。これらの結果から、各教員がそれぞれの専門分野の特性にあわせて学生個々の学修状況を確認しながら、丁寧な教育していることがうかがえた。一方、総合満足度との相関はみられなかったが、各設問で点数のみで確認すると、Q14「この授業はよく出席した・参加した」(4.52、相関係数 0.33)、Q10「出席確認の方法が適切であった」(4.48、相関係数 0.40)が高かった。健康栄養学科では、通年で欠席調査を行い、教職員が連携して出欠席の管理を強化している。われわれのきめ細やかな教育が学生にも確実に伝わっており、また学生自身が出欠席に対しても意識していることが結果として表れたと考える。

②今後の課題

健康栄養学科は実験・実習でのグループワークも多く、在学中のコミュニケーション力向上も重要視していることから、Q13「自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」、Q19「この授業により、『自分を誇りを持つ力』が向上した」、Q21「この授業により、『人を理解し自分を表現する力』が向上した」の項目については、引き続き強化できるようにしたい。また、毎年の課題となっている回収率については、2022 年度からみると 81.4%、66.4%、60.5% (いずれも通年) と年々低下している。授業評価を教育により反映させるためには、授業評価アンケートの回収率を高める必要がある。各授業でアンケート回答時間を確保しているものの、個々での回答については確認が難しい。回答率を上げるためには、時間の確保だけでなく、アンケートの取り方にも工夫しなければならない。健康栄養学科では、管理栄養士に必要な高度な知識と技術、コミュニケーション能力を身につけることを教育目標としている。2024 年度のアンケート結果からも、学生自身が他者と協力して学びを深めることができ、自身でその向上を認識・評価できていたと考える。

9) 家政福祉学科の専門科目の課題 (学科長 丸谷充子)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

2024 年度の家政福祉学科専門科目に対する総合満足度の平均値は 4.51 であり、全体平均値 4.44 より 0.07 ポイント上回っており、2023 年度、2022 年度とほぼ同様の結果であった。これまで当学科の授業評価は総じて高く、大学全体の平均を下回る評価項目は少ない状況であるが、2024 年度もこれまでと同様の結果であった。Q14、「この授業はよく出席・参加した」の項目が全体平均と同じ 4.52 であったのみで、他は全ての項目で全体平均を上回る結果であった。

項目別では、Q19「この授業により『自分を知り誇りを持つ力』が向上した」、Q20「この授業により『基礎学力と文章力』が向上した」、Q21「この授業により『人を理解し自分を表現する力』が向上した」、の3項目は、3年連続で上昇し、Q22「この授業により『課題を解決する力』が向上した」、Q23「この授業により『社会に役立つ専門力』が向上した」の2項目も高得点を保っていることから、学生が学びによって知識や技能を得られたと感じられるような学びをしているものと思われる。

他学科との比較では、Q16「この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ」、Q18「この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた」、Q19「この授業により『自分を知り誇りを持つ力』が向上した」、Q23「この授業により『社会に役立つ専門力』が向上した」の4項目が高得点となっており、資格取得を目指す学生が多いことから、家政福祉学科の学びの内容に対する満足度につながっていると推察される結果であった。

②今後の課題

最も低い得点であった Q13「自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」は 3.83 で、昨年度の 3.76 から改善傾向にあるとはいえ、他学科との比較でも上から 5 番目という順位であった。昨年度、これらの結果を学科で共有した上で、学生の発言や質問のしやすさの改善を図るため、教員の働きかけを工夫したことが功を奏した面もあると考えられる。一方、家政福祉学科の学びの特徴として、実習や演習でのグループワークが多く、参加型の授業の割合が多いことがあげられるが、学生自身は参加をすることが特別なことでなく当たり前のことと捉えていることによる結果であることも考えられる。今後はさらに工夫を重ねて、学生の満足度の向上を図りたい。

最後に、全体平均よりは上回っているとはいえ、回収率が 58%である点については昨年度も回収率アップを改善点として挙げたにも関わらず、1 ポイント下降した。今年度は回収率を上げることで学生全体の声に耳を傾け、さらなる総合満足度の向上を目指したい。

10) 看護学科の専門科目の課題 (学科長 大堀昇)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

看護学科の総合満足度 (Q24) は、毎年上昇し 2024 年度は 4.42 となった。しかし、学科全体の総合満足度 4.44 と比較すると、まだ低い結果である。項目別では、他学科との比較ではまだまだ低い項目はあるものの、多くの項目が改善傾向にある。得点 4.35 以上と高かった項目は、2023 年度の Q2・Q3・Q4・Q10・Q12・Q14・Q16・Q24 の 8 項目に Q6 も加わった。高得点だった項目の内容を見てみると、Q2「シラバスに沿っていた」、Q3「知的刺激に富んでいた」、Q4「新しい知識・技術を学べた」、Q6「教材は理解に役立った」、Q10「出席確認方法が適切」、Q12「教員の熱意を感じた」、Q14「出席・参加」、Q16「積極的に取り組んだ」、Q24「総合的に満足」であった。要因として、対面授業のため直接学生と教員とのやり取りのある授業形態だったことから、知的好奇心を直に刺激され、出席状況や課題等への取り組みが向上し高得点につながったものとする。教授する側も対面授業とともに manaba course や CLEVAS、その他の IT 教材を上手に活用したり、シミュレーションを取り入れたりして授業方法を改善した結果と考える。

全体平均点より上回った項目は、Q5「学生の反応を考慮して進めた」、Q7「説明がわかりやすかった」、Q9「質問への対応が適切だった」など、2023 年度以上に学生の学習ニーズに沿った

授業展開や対応を示す項目が増えていた。そのことにより、Q13「積極的に意見や質問をした」、Q14「よく出席・参加した」、Q15「自己学習の時間を確保した」、Q17「さらに勉強したくなった」、Q18「学びの目標達成に近づいた」、Q19「自分を誇りを持つ力が向上した」、Q20「基礎学力と文章力が向上した」、Q21「人を理解し自分を表現する力が向上した」、Q22「課題を解決する力が向上した」、Q23「社会に役立つ専門力が向上した」の学習に対する興味・関心、学習行動、達成感を示す項目においても全体平均を上回った数が増えたと考える。これらの項目が意味するものは、本学科のディプロマ・ポリシーにある「倫理観」「自律性」「専門性」「地域・社会貢献性」「多様性の理解」「継続する力」の内容であり、目指す教育が実現されつつあるものと考ええる。

他学科平均点との比較では、Q2～Q12・Q14・Q16・Q18・Q23・Q24 の 16 項目の得点が低かった。この傾向は 2023 年度同様である。多くの項目が低かった要因としては、クラスサイズが大きいことや学修すべき内容が多いことから、授業が教員から学生への一方的な知識伝達になりやすく、授業中に学生の理解を確認したり質問を受けたりといったコミュニケーションをとることが少ないこと、また演習が多く課題が多いため学生自身にゆとりがないことも挙げられる。しかし、Q5・Q7・Q14・Q16・Q18・Q23 の項目は、2023 年度より改善している。学習ニーズに沿った授業展開とその反応としての興味・関心、学習行動、達成感の向上が図られ、双方向授業への努力も感じ取れる。

②今後の課題

年々得点が上昇しているものの、多くの項目で全体平均点や他学科平均点と比較し低かった。クラスサイズが大きいことや専門知識に関する学修内容の多さから一方的な授業方法となりやすいことが要因と考えられる。今後の課題として、2024 年度に引き続き、教員と学生とのコミュニケーションを図り、双方向の授業展開ができるよう工夫していく必要がある。また授業への満足度を上げるためには、学生の達成感や充実感が味わえるよう工夫することも大切であると考えられる。そのために、事前学習内容を検討するなど学習レディネスを高める方略やさらにアクティブラーニングを取り入れるなど、継続して学生の興味・関心を促す取り組みをしていきたい。

以上、共通総合科目・各学科における専門科目別に、①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因、②今後の課題をみてきた。2024 年度は、2023 年度よりも更に対面授業が増加し、9 学科中 8 学科で 99%の実施率となった。全学教育センター、各学科ともに、前年の授業評価を真摯に受けとめ、学生の教育の質及び満足度の向上を目指して取り組んでいる状況がみられた。学生の評価も、高評価項目の維持や低評価項目の微増など、改善傾向がみられている。

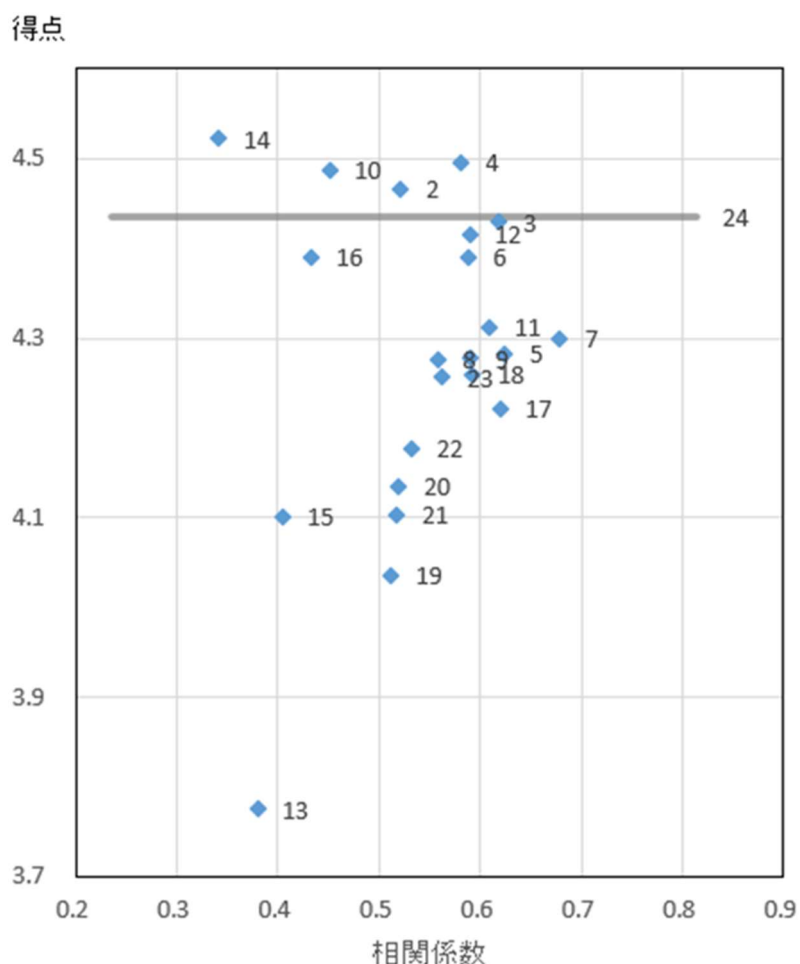
しかし、Q13 の「自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」は依然として共通科目・専門科目ともに唯一の 3 点台であり (3.77)、2023 年度よりも 0.01 ポイントの低下がみられた。これには本学の学生の特性に加えて、学科の特徴、クラスサイズなど様々な要因が影響していると考えられる。授業に対して能動的に臨み積極的に意見や質問をする行動は、本学の使命である“人を支える「心」と「技術」を持って行動する女性”を育成するためには重要な要素である。科目の特徴や時間的制約など難しい状況も推察されるが、学生の積極的に意見を発信できる力を育成するためには、意見を発信しやすい環境、授業方法の工夫が重要である。これには、事前課

題及び事後課題、manaba などの学習ツールの活用も含め、各科目での更なる工夫を期待したい。これに加え、授業が授業者と受講者の相互交流の中で展開されるものであることから、学生自身の授業への自己の取り組み姿勢の重要性を認識できるような働きかけも必要となる。

また、Q19-23（「自分を知り誇りを持つ力」「基礎学力と文章力」「人を理解し自分を表現する力」「課題を解決する力」「社会に役立つ専門力」）の項目は、Q23 の「社会に役立つ専門力」を除くと 4.1 台と低値傾向にあった。これらの項目は、自己の能力の向上をすぐには実感しづらい内容である。従って、フィードバックなどを活用し、学生の能力が向上している、あるいは更なる努力が必要などということを授業者から積極的に伝えることも必要と考える。

最後に、共通科目・専門科目それぞれの授業評価の適切性を高めるための質問項目の検討及び回答率を上げるための取り組みも継続して行っていく必要がある。

図3 授業の総合満足度(Q24)と他項目との相関
※プロット脇の番号が質問番号を示す



5. 資料

参考：2024 年度授業評価アンケート設問

※Q2～Q24 の⑤～①は評価点数となります。④は点数に含まれません。

		強く 思う	そう 思う	どちら でもない	そう 思わない	全く 思わない	答え たくない ・ 該当 しない
Q1	この科目の授業開講方法を選択してください ① 対面授業 ② メディア授業（遠隔オンデマンド）	-					
Q2	この授業はシラバス（変更したシラバスも含む）に沿っていた	⑤	④	③	②	①	④
Q3	この授業の内容は知的刺激に富んでいた	⑤	④	③	②	①	④
Q4	この授業で新しい知識・技術を学べた	⑤	④	③	②	①	④
Q5	教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた	⑤	④	③	②	①	④
Q6	教材（配布資料、動画、音声、パワポなど）が理解に役立った	⑤	④	③	②	①	④
Q7	教員の説明がわかりやすかった	⑤	④	③	②	①	④
Q8	教員へ質問できる時間や環境があった	⑤	④	③	②	①	④
Q9	教員の質問への対応が適切だった	⑤	④	③	②	①	④
Q10	出席確認の方法が適切であった	⑤	④	③	②	①	④
Q11	この授業の運営時間、学習量が適切だった	⑤	④	③	②	①	④
Q12	この授業から教員の熱意を感じた	⑤	④	③	②	①	④
Q13	自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした	⑤	④	③	②	①	④
Q14	この授業はよく出席・参加した	⑤	④	③	②	①	④
Q15	この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した	⑤	④	③	②	①	④
Q16	この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ	⑤	④	③	②	①	④
Q17	この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった	⑤	④	③	②	①	④
Q18	この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた	⑤	④	③	②	①	④
Q19	この授業により、「自分を誇り誇りを持つ力」が向上した	⑤	④	③	②	①	④
Q20	この授業により、「基礎学力と文章力」が向上した	⑤	④	③	②	①	④
Q21	この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した	⑤	④	③	②	①	④
Q22	この授業により、「課題を解決する力」が向上した	⑤	④	③	②	①	④
Q23	この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した	⑤	④	③	②	①	④
Q24	あなたのこの授業に対する総合的な満足度を示してください ⑤大変満足 ④やや満足 ③どちらでもない ②やや不満 ①不満 ④該当しない・答えたくない	⑤	④	③	②	①	④
Q25	Q この授業についての意見・感想・希望等あなたが思っていることをできるだけ具体的に何でも入力してください	自由記述					

※マナバコースでの選択肢は仕様上、1「強く思う」～5「全く思わない」、6「答えたくない」としています。

2024(令和 6)年度 授業評価アンケート報告書

2025(令和 7)年 9 月

編集 和洋女子大学 大学・大学院評議会

担当 多賀昌樹 白鳥孝子

発行 和洋女子大学

〒272-8533 千葉県市川市国府台 2-3-1

TEL 047-371-1111